No.768 2017 July August 7 8

The Young Men's Christian Association News

THE YMCA

「パートナーズ・サポート・グループ」という実践的な取り組み

―アジア・太平洋地域のYMCAがその働きを強めるために

アジア・太平洋YMCA同盟総主事
ナム・ブウォン

豊かな者と貧しい者、力を持つ者と持たない者、進歩を遂げる者と取り残される者……現代社会において、二極化がますます進んでいることは誰もが認めるところです。国家間だけでなく、国家の内部でも生じている二極化や深刻な分裂の大きな原因の一つは、自由競争を重んじる"新自由主義的"グローバル化であると指摘する学者もいます。この望ましくない現象は、YMCAが大切にしている聖書の教えや価値とは相反することを私たちは知っています。しかし、アジア・太平洋地域のYMCAも、運動や組織の活発さ、財務の能力、コミュニティへの影響力において、二分されていると言わざるを得ません。

YMCAとそこに連なる私たちは、基本的な問いに向き合います―YMCAは社会を支配するこのような風潮を映し出す鏡にすぎないのか。いや、そうではなく、聖書の教えや価値を伝える流れを生み出すことを目指していくのか、と。私たちアジア・太平洋YMCA同盟の行っている「パートナーズ・サポート・グループ(PSG)」は、後者に関連した取り組みと言えるでしょう。

PSGの中心をなす精神は、連帯と協働。「互いに支え合い、共に豊かになることを通して、健全に成長すること」です。PSGメンバーのYMCAは自発的にこの取り組みに参画し、新しく生まれた「YMCA」やさまざまな課題に直面している「YMCA」を支え、また、「YMCA」はPSGメンバーとユニークな関係を築きます。支援するYMCAは、ボーダーの向こうにある社会の現実を知り、交流し、学び合い、時には協働のプロジェクトや共通のミッションへの取り組みを通して、多くのことを得ます。その中心にユースが存在していることも特色の一つでしょう。

現在、私たちのネットワークでPSGが支援しているのは、カンボジア、モンゴル、東ティモールのYMCAです。また、ラオスでのYMCA設立を視野に入れて、地域の組織委員会をサポートするPSGも新たに始め、インドネシアYMCAを支援する取り組みも、数年ぶりに再開しようとしています。

アジア・太平洋YMCA同盟は、カンボジア、インドネシア、モンゴル、東ティモールのYMCAへの支援をPSGメンバーとして継続されている日本のYMCAに、深く感謝の意を表します。日本のYMCAが、しっかりと関わってくださったからこそ、これらのYMCAはここまで成長したのでしょう。

しかし、PSGの取り組みは、いつも期待するような成果を挙げられるわけではありません。「YMCA」の歩みは、時として非常に遅い場合があります。社会や歴史的背景の多様性の理解と忍耐が必要です。そして何よりも、YMCA相互の信頼こそが、成功を生み出す鍵なのです。

PSGは、私たちが暮らすアジア・太平洋地域のYMCAが互いに協力し合い、共に生きるための道であると信じます。"多様性の中の一致"という精神に立って共に進むこの道は、すべてのYMCAの公正な成長とその働きを強める道へと続いているのです。

※「パートナーズ・サポート・グループ」については、2・3面をお読みください。

RAPPORT

ラポール

相手と向き合って
心を合わせていくこと。
(仏語:親和・共感的関係の意)

宗教改革500年に

日本福音ルーテル
本郷教会牧師
安井 宣生

日本政府が国連の特別報告に対して行った抗議が、英語でプロテストと書かれていました。その内容には触れませんが、キリスト教の世界以外でこの言葉に出合う新鮮さを感じ、プロテスタント教会に属する自分は「抗議」という看板を下げているのかと思いを新たにしました。そして、そのような看板など手放してもよいのではないかと思いました。

1517年10月31日、ルターによる投げかけに始まった運動は、当時のカトリック教会に対して抗議書を送ったことから、抗議と評されました。投げかけた側もそう呼ばれることを自負していたに違いありません。抗議する側にも、抗議される側にも、いずれも自分たちこそ正義であるという姿勢がありました。宗教改革運動はまさしく互いの正義がぶつかり合うものであり、その対立が世界規模の分裂を引き起こしてしまったのでした。それはイエスの「すべての人を一つにしてください」(ヨハネによる福音書17章21節)という祈りからは遠く離れたものでした。

しかし今や、カトリック教会とルター派教会(ルーテル教会)の間に「抗議」の状況はありません。特に最近50年に積み重ねられてきた対話は、イエスの祈りに近づこうとするものであり、互いの理解と信頼を育むものでした。昨年10月31日にはルーテル世界連盟議長と教皇が署名し「一致を傷つけてきたことをキリストのみ前でざんげし、悲しみます」(ルーテル教会とカトリック教会との「共同声明」)と表明し、「互いの見方を曇らせてきた傷と記憶の癒しを」(同)共に祈るところまで導かれました。宗教改革の始まりから500年という時間の大半が争いの歴史であったことは事実ですが、もはや共生の関係を歩んでいるのです。宗教改革500年を記念することは、互いの正義のぶつけ合いではなく、和解を求めて共に歩み出す喜びを共有することなのです。

「抗議」という看板を降ろして。

不正や暴力に対し抗議の声を上げるのは大切なことです。けれども正義の主張にとどまらず、誤りについては許しを求め合う。これは何もキリスト教の内部だけのことではなく、私たちの生きるあらゆる領域で大切にされてよいことなのではないでしょうか。

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、
イエス・キリストにおいて示された
愛と奉仕の生き方に学びつつ
世界のYMCAとのつながりのなかで、
次の使命を担います。

私たちは、
すべての人びとが生涯をとおして
全人的に成長することを願い、
すべてのいのちを
かけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、
一人ひとりの人権を守り、
正義と公正を求め、
喜びを共にし痛みを分かちあう
社会をめざします。

私たちは、
アジア・太平洋地域の人びとへの
歴史的責任を認識しつつ、
世界の人びとと共に
平和の実現に努めます。

2017年7月1日発行 (毎月1日発行)
1947年10月27日　第三種郵便物認可
本体価格45円 (外税) (送料62円)
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003　東京都新宿区本塩町7
TEL:03-5367-6640　FAX:03-5367-6641
URL:http://www.ymcajapan.org/
発行人／神崎 清一　編集人／山根 一毅
印刷／あかつき印刷株式会社

アジア・太平洋地域のパートナーと共に

～日本のYMCAと「パートナーズ・サポート・グループ」が目指すもの～

教育を受けたい、仕事を得たい、安全に暮らしたい……。

世界には政情不安や自然災害などにより、こういった当然の権利を得るのが難しい国や地域があります。その地にあるYMCAは、自らも困難のうちにありながら、地域社会が良くなるように、子どもや若者が希望をもって生きていけるように、今日もさまざまな活動を行っています。

このような困難な状況にある「YMCA」や新しく生まれた「YMCA」を、アジア・太平洋YMCA同盟のコーディネートにより、複数国のYMCAが共に支えています。この取り組みが、「パートナーズ・サポート・グループ（PSG）」です。巻頭言でナム・プウォン氏が述べているように、PSGで関係を築いた各国のYMCAは共に成長し、その働きが強められています。

今号では、PSGに関わる日本のYMCAのスタッフと、現地の「YMCA」のユースの声をお届けします。

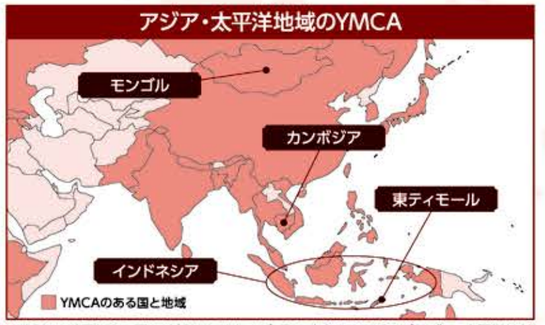
私たちとPSG

日本のYMCAはカンボジア、インドネシア、モンゴル、東ティモールのYMCAとパートナーになり、現地の青少年活動や貧困地域での取り組みなどを支援しています。

「YMCA国際協力募金」も、現地のチャイルドケアや子どもを対象にしたプログラム、親の職業訓練、ユースが主体となって行うワークやピースキャンプといった活動に用いられます。

私たちが特に大切にしているのは、YMCAを通して互いを知り、理解し、つながること。各国の「YMCA」の活動を支えるために経済的支援をすると同時に、ユースが交流する機会を提供したり、平和をテーマにしたキャンプを共に行ったりしています。

そしてこれらの支援が、現地のYMCAの働きに生かされ、地域の未来へとつながっていくのです。



YMCAは世界119の国と地域にありますが、その内24のYMCAがアジア・太平洋地域にあります。私たちは、自分が所属するYMCAから日本、アジア・太平洋地域、そして世界の人たちにつながっているのです。

横浜YMCA と カンボジアYMCA

カンボジアのチャイルドケアセンターを訪問して

石垣 麻里奈（YMCAかわさき保育園・保育士）

子どもたちが、歌を歌って歓迎してくれた

今年の2月20日から25日まで、プノンペンのカンボジアYMCAやシェムリアップYMCAチャイルドケアセンターなどを訪問しました。横浜YMCAの募金により2015年から運営を開始したこのセンターは保育園のような所で、現在は2歳から6歳までの子どもたちが15人います。教師のエスタさんと身の回りのケアをするピアさんが働いていますが、歩いて10分ほどの所にはスラム街があり、女性2人だけではとても危険だと感じました。

エスタさんは一人で保育を行っていて、活動には限りがあると言っていましたが、今回、念願だった水泳プログラムを初めて実現することができました。カンボジアでは、子どもが川で溺れる事故が多いそうなのです。センターの衛生環境や子どもたちの生活習慣についても気になるところがあり、私は、学んできた知識を伝えたい、保育士としてエスタさんの力になりたいと思いました。

カンボジアには出生届の出ていない子どもがたくさんいます。センターを出た子どもたちも、就学や就労が難しい現実があります。私は保育をする仲間としてエスタさんとつながりながら、カンボジアの子どもたちの未来を守るために何ができるのか、これからも考え続けていきたいと思います。

保育を通して、地域が変わる

エスタさん（シェムリアップYMCAチャイルドケアセンター保育士）

私はエスタ。チャイルドケアセンターの保育士として働き始めて2年になります。スラム街に暮らす人や、村の貧しい人たちの子どもを預かっています。ここで働き始めてから、私はコミュニティにあるさまざまな問題に気付くようになりました。そしてそれは、カンボジアの他の地域にも見られます。スキルがないために仕事が得られない、教育が受けられない……。このようなことは彼らの人生に影を落とし、家族はギャンブルや飲酒の問題を抱え、争いごとなどに巻き込まれたりもしています。

私たちは保育を通して、人びとの生活環境を良くしたいと思っています。このセンターでは朝の7時から夕方の5時まで子どもたちを預かります。ご飯の時間も、勉強の時間もあります。小さな子どもの世話をすることで、女性たちや家族は、建築業、電気技師、マッサージ師、洗濯屋、空き缶回収など、それぞれの仕事に行くことができるのです。

仕事を終えて子どもを迎えにきた親に、「チャイルドケアセンターをどう思いますか」と聞いてみました。プール掃除の仕事をしているお父さんは「自分は子どもの心配をしないでフルタイムで働けるし、子どもは勉強を教えてもらえてハッピーだよ。先生が子どもをちゃんと見てくれているって信用しているよ」と答えてくれました。あるお母さんは、「私は貧しくて、読み書きもできないの。子どもたちもまだ小さくて、夫の仕送りを待つだけだった。食べ物も十分じゃなくってね。働きたかったけど、誰も子どもを見ていてくれる人がいなかったの。でも今は、YMCAのチャイルドケアセンターが見ていてくれる。おかげで、ホテルの庭を手入れする仕事に就けたわ」と。

二人の話を聞いた時、YMCAと私はカンボジアの役に立っていると思いました。大きなことではないかもしれないけれど、少なくともこのセンターは、カンボジアのある部分で、人びとの役に立っているのです。

エスタさんと子どもたち

YMCAせとうち と インドネシア・ジョグジャカルタYMCA

変化を続けてきたキャンプ

白鳥 雅人（YMCAせとうちスタッフ）

2006年にインドネシア・ジャワ島中部地震が発生。その支援のため、2007年にジョグジャカルタ・ワークキャンプは始まりました。当初の計画通り、2009年まで3年間実施した後、2010年からの3年間は、ムラピ山という火山の噴火で被災した村への支援キャンプを実施しました。

そして2013年からは、それまでの支援する側とされる側、という関係ではなく、ジョグジャカルタYMCAとはパートナーとしての対等な立場で、平和を考える「ユース・ピース・キャンプ」を実施しています。国民の約90%がイスラム教徒というインドネシアで、違いはあれども同じ地球市民として、宗教を超えて共に平和を構築していくためには、「尊敬心」と「調和」が大切だということを学んでいます。

第1回のキャンプ。村の子どもたちと一緒にジャワ伝統の笠にペイントをした（2007年）

違いを越えて、理解し合える場所

ジミーさん（ジョグジャカルタYMCAボランティア）

ハイ！　僕の名前はジミー。ジョグジャカルタYMCAのメンバーになって3年目。

2014年にユース・ピース・キャンプ（YPC）に参加したのがきっかけです。その時はメンバーとして参加したのですが、キャンプの後、YMCAのことをもっと知りたくなって、ボランティア登録をしました。キャンプの途中でYMCAは楽しいところだって分かったからです。

YMCAで僕はいろんなバックグラウンドを持つ、たくさんの人に会いました。そもそも、インドネシアは多様な国です。人口約2億3,800万人（2010年）の内、約9割がイスラム教徒、その他プロテスタント、カトリック、ヒンドゥー教徒など、さまざまな宗教があり、言葉は742種類もあります。すごくないですか？

最近はテロや、他宗教を攻撃するヘイトスピーチもあり、不安です。争いを引き起こそうとする人たちがいますが、僕は巻き込まれたくありません。なぜなら僕のようなユースは、平和を創る1ピースとなって、この国を照らさなくてはならないと思うからです。僕は、多くの人が注目するような大きなことはできませんが、小さなことから始めたいと思っています。だから、僕は毎年YPCに関わり、今では運営委員になっています。運営委員会は、イスラム教徒の団体や学校でのワークショップも用意します。だから参加者は、他の視点から見る平和を学び、分かち合うことができるのです。

YPCで僕は、たくさんのことを学びました。違いを受け入れること、異なる宗教や文化の人たちと一緒に活動すること、他者を理解し、受け入れること……。YMCAに出合って、僕の目と心は開かれました。僕たちは宗教や民族、肌の色などで人を判断するのではなく、人としてお互いを理解し合わなければなりません。YMCAはユースを平和の使者へと導く場所なのだと思います。

ユース・ピース・キャンプで。左端がジミーさん

熊本YMCA と 東ティモールYMCA

サッカーを通して世界を知る

中村 賢次郎（熊本 YMCAスタッフ）

「同じ9歳の子がはだしでサッカーしてる！」

「東ティモールって初めて知った！」

熊本の子どもたちは驚きました。

熊本YMCAは2012年からスタッフを現地に派遣し、サッカーを通じた支援などを行っています。ユースや子どもたちへの指導、現地の指導者向けの研修に加えて、熊本の子どもたちからはシューズやウェアを贈ったり、熊本YMCAで集めた募金やお祭の益金、ワイズメンズクラブからの支援で購入したサッカーボールなども数回にわたって現地に送っています。

ウディスさん（左端）、フランシスさん（左から3人目）とサッカークラスの子どもたち。2人はYMCA東山荘で「地球市民育成プロジェクト」夏期研修にも参加した（2016年）

また現地スタッフを熊本YMCAに招待して研修を行い、地域の小学校で平和を考える授業や国際交流も行っています。2016年に来日した2人のスタッフは、幼児の体操や英会話などYMCAのプログラムにも参加、東ティモールYMCAでサッカーを指導するフランシスは、子どもたちと一緒にサッカーを楽しみました。

子どもたちは初めての国に関心を寄せ、東ティモールの人びとが安心して生活するためにできることは何かを考えるきっかけを持ちました。海を越えて平和を考え、行動する。平和な世界を創るために、子どもたちの歩みが始まっています。

一つになって、明るい未来へ

ウディスさん（東ティモールYMCAスタッフ）

こんにちは。私はウディス。東ティモールは、2002年にインドネシアから独立した若い国です。国民の多くは所得が低く、子どもを大学に通わせるのも難しい現状があります。せっかく入学できても、経済的理由から途中で大学に行けなくなる子もいます。雇用の機会も十分ではありません。そのため、多くの若者たちが英国やアイルランド、韓国、オーストラリアなどに職を求めて出て行きます。一方、残された若者たちは職を得られないまま、抑圧の中で互いに衝突してしまうことがあります。このようにユースは日常的に不安定な状況に置かれているのです。

子どもとユースが「サッカーYMCAカップ」に集まった

東ティモールYMCAは地域に根差すキリスト教団体として、「ユース・ピースキャンプ」など若者たちが主体となって取り組む活動を行っています。中でも、「サッカーYMCAカップ」は、2006年の東部出身者と西部出身者の対立による騒乱をきっかけに生まれたものです。平穏な日常を失ったことで人びとの心に影を落とした時、YMCAは子どもとユースを集めてサッカー大会を行いました。出身や背景の違いを超えて、皆で一つになろうとしたのです。

私の願いは、東ティモールの若者たちが抑圧や争いに飲みこまれず、明るい未来へ向かって進んで行くこと。一つになって「平和」を創っていくことです。

モンゴルYMCA　ユースからの発信

私たちの社会の今とこれから

モンゴルYMCAのリーダー会の様子

モンゴルは、貧富の格差がとても大きい国です。そのため社会には多くの困難が生まれます。最も深刻なのは、責任ある大人になるために必要なモラルや価値を、ユースが学ぶ場がないということです。私たちの社会は発展しようとしていますが、モラルや価値を身に付けていなければ、うまくいかないでしょう。政治の腐敗や経済の不安定によるストレス、飲酒、失業……個人も家族もさまざまな問題を抱えています。

このような状況下では、ユースは変革を求めるよりも、現状維持へと流されてしまいます。関心は自分に向き、コミュニティに変化を起こすために協力し合うということもありません。ユースが共に集えるようなパブリックスペースもなく、奨学金制度も十分ではありません。大学を卒業しても、専門を生かした仕事に就ける道はほとんどありません。

それでも、ここで平和を築こうと思うなら、「一致」を目指していくことです。人の声に耳を傾けること、コミュニケーションが非常に重要です。経験を互いに分かち合い、そこから学ぶのです。しかし、その場のインパクトを求めず、未来を見据えた変化を起こし、それを維持していこうとすれば、時間はかかります。

モンゴルYMCAでは、私たちの国と社会に良い変化を起こそうと活動しています。困っている子どもたちや家族のために生活用品やプレゼントを贈るプロジェクト、ユースのためにはスポーツやハイキングはもちろん、学びと研修の場を提供する教育センター、居場所をつくるコーヒーショップといった取り組みを実施しています。さらには児童養護施設と提携し、子どもたちを励ましに行ったりもしています。

ユースたちの目が開かれ、共に、社会に変化を起こしていくことができますように。YMCAから生まれた変化が、モンゴルの社会の変革へとつながっていくことを願っています。

モンゴルYMCAユースリーダー 一同

NEWS
各地の動きをご紹介します。

●第9回オリーブ平和映画祭『歌声にのった少年』を上映
——在日本韓国YMCA

パレスチナの東エルサレムYMCAと交流を続けている在日本韓国YMCAでは、毎年5月に東京センテニアルYサービスクラブ(ワイズメンズクラブ)との共催で「オリーブ平和映画祭」を開催し、パレスチナ社会の現状や人びとの暮らしぶりを伝える映画を上映しています。今年第9回となった同映画祭が、5月20日、在日本韓国YMCA地下ホールで行われました。

パレスチナでのプログラムに参加した仲間が、毎回、ボランティアとして運営を支える

今回の上映作品『歌声にのった少年』は、素晴らしい歌声を持つガザ出身の少年が幾多の困難を乗り越えアラブ世界のスターになった実話をもとにした劇映画でした。ガザの人びとの厳しい生活状況や爆撃で廃墟となった街の様子が映し出される一方、希望を失わずに生きることの大切さ、尊さが素晴らしい音楽にのせて描かれており、ご覧になった方々に大きな感動を与えました。

上映前には、パレスチナのYMCA·YWCAが実施するオリーブ収穫プログラムに昨年の秋に参加した東矢高明さん(東北大学YMCAシニア、東京YMCA会員)から現地訪問報告がありました。また、現地のプログラムディレクターであるニダル·アブズルフさんから寄せられた「私たちは、占領、植民地化、抑圧の下で暮らしています。自由と独立への私たちの権利を支持してくださる皆さんの活動は、私たちに力を与え、私たちの希望を支えてくれます。長年にわたり上映会を開催していらっしゃる皆さんの素晴らしい連帯の思いに、心から感謝しています」というメッセージも紹介されました。

当日は、現地のYMCAで製作されたオリーブクラフトや、フェアトレードで輸入されたオリーブオイル、オリーブ石けんなどの販売も行われました。上映および物品販売による収益は、東エルサレムYMCAとの交流活動および現地実施プログラムの支援のために用いられます。

在日本韓国YMCA　田附 和久

●「子どものための心理的応急処置(PFA)研修」を開催
——横浜YMCA

4月15日、横浜中央YMCAを会場に「子どものための心理的応急処置(PFA)研修(Psychological First Aid for Children／ワールド·ビジョン·ジャパン主催／横浜YMCA協力)」が行われ、横浜YMCAの学童クラブやオルタナティブ事業などを担当するスタッフが参加しました。研修では、災害や事故に直面し、ストレスを抱えている子どもや養育者の精神的苦痛を悪化させないよう支援し、彼らのニーズに応えていく方法を学びました。

ディスカッション内容を発表し、他のグループと意見交換を行った

災害や事故などで心理的ストレスを抱えている子どもは、いち早くそのストレスに対応できる専門家へとつなげることが大切です。研修では、子どもが抱えるストレスを発見し観察して「見る」、子どもがどのようなストレスを抱えていて、どのような状況に置かれているかを「聞く」、子どもが抱えているストレスに対応できる中間支援機関、専門家や専門機関に「つなぐ」の3つのポイントについて学びました。ディスカッションやロールプレイが多く行われ、より実践的に学びを深めることができました。

この内容は災害や事故に限ったことではありません。子どもたちを取り巻く環境がさまざまに変化していく中で、子どもと関わる大人が身に付けていなければならない知識やスキルです。「見る」「聞く」「つなぐ」が日常の中にあれば、子どもたちが安心して、のびのびと成長することにつながると感じました。

実際のシチュエーションを想定したロールプレイ
(写真提供:World Vision)

今回はYMCAのスタッフが対象でしたが、この研修は、日常の連携やつながりを大切にしながら、子どもたちの心理的ストレスに対応するために専門家や機関に「つなぐ」ことをゴールにしていました。専門性のある働きも多く行うYMCAは、「つなぐ」役割と同時に「つないでもらい対応する」役割も担っていく団体であることを再認識しました。

横浜YMCA　大塚 英彦

＊PFA研修は今後、全国複数のYMCAを会場に実施される予定です。

●「第3期チェンジ・エージェント」決定
——日本YMCA同盟

2017年4月より、世界YMCA同盟「チェンジ·エージェント」第3期がスタートしました。第3期のメンバーは3人のボランティアリーダー、桑原ケビン清治さん(広島YMCA)、四宮捷平さん(神戸YMCA)、中田美沙希さん(横浜YMCA)です。気候変動についての学び、世界のチェンジ·エージェントとのトレーニングや所属YMCAでのユースエンパワーメントの取り組みなどさまざまなプログラムを経験し、2018年12月まで活動を行います。

第3期チェンジ·エージェント。左から桑原さん、中田さん、四宮さん

今年度は、いよいよ日本のYMCAのブランディングがスタートします。チェンジ·エージェントのメンバーが、ブランディングの原動力となるユースエンパワーメントを推進し、周りのユースと共に「ポジティブネット」の具現化に関わっていきます。

第一弾の活動として「ワールド·チャレンジ2017」を実施しました。「ワールド·チャレンジ」は6月6日のYMCAの誕生日を機に世界中のユースリーダー(チェンジ·エージェント)が、ユース世代の直面している問題や課題、その解決のためのアクションについてSNSなどを通じて全世界に発信する取り組みです。今年のワールド·チャレンジのテーマはYMCA発祥のバスケットボールにちなんだ「Empowering Young People Through Basketball」でした。日本では、チェンジ·エージェントから全国のYMCAに呼び掛けを行い、6月3～20日の18日間、Facebookを通じてメッセージを発信し、さまざまな声を共有しました。

このようなチェンジ·エージェントの取り組みは、全国YMCAのボランティア、スタッフ、学生たちユースをつなぎ、次第にその輪を大きくしていきます。そして、ユースたちが声を上げ、その声に耳を傾ける人たちがいるYMCAに、社会を変えていく力が宿ります。チェンジ·エージェントと全国YMCAのユースが生き生きと活躍できる場が、さらに増えることを期待しています。

●第5期会館として「神戸YMCA三宮会館」を竣工
——神戸YMCA

2017年に131周年を迎えた神戸YMCAは、人びとの生涯にわたる心身の健全育成をはじめ、体育、教育、福祉、国際の分野において、神戸市とその周辺都市で社会貢献を続けてきました。

その活動拠点の一つ、神戸市中央区加納町にあり本部機能を担ってきた第4期会館では、時代ごとの社会の課題に対してさまざまな活動を展開してきましたが、築40年を越え、老朽化が進んでいました。

そこで、長年にわたり検討·協議されてきた「三宮会館再開発事業」を具体的に進めることになりました。まずは、2014年9月に「ファミリーウエルネスセンター」を竣工、そしてこの度、集大成となる第5期会館として「神戸YMCA三宮会館」を竣工することができました。この事業に際して賜りました多くの方々のお祈り、ご支援に心から感謝申し上げます。

「三宮会館」は地上11階建てで、3階部分までは神戸YMCAの本部事務局、チャペル、専門学校(ホテル学科、日本語学科)、国際活動やキャンピングサービスなどの地域活動サービスに用いられ、4階から11階には協働事業者(株式会社 生活科学運営)による高齢者の方の入居住宅(介護付有料老人ホームを含む)が併設されているのが特徴です。また同じ中央区にある「ファミリーウエルネスセンター」と協働していくことができる利点を生かし、この会館が「したい何かがみつかり、誰かとつながる。私がよくなる、かけがえのない場所」として会員、ボランティア、学生、入居者の方々、地域の皆さまによって磨かれ、用いられていくことを願っています。

3月19日の完成記念礼拝の後、5月13日には竣工記念式典とオープンハウスDAYを開催。国内外のゲストをはじめ、全国のYMCA関係者や地域の方々が足を運んでくださり、本格的なスタートとなりました。この時代に新しい会館が与えられたことに感謝しつつ、この場所での人とのつながりを通して、YMCA運動とその価値を未来へ紡いでいきます。ぜひ神戸にお越しの際は三宮会館へお立ち寄りください。

神戸YMCA　岩井 義矢

第5期会館となる「神戸YMCA三宮会館」

竣工記念式典には、姉妹都市YMCAのシアトル(米国)、大田·水原(韓国)YMCAからゲストをお迎えした